

連載3 『プラーグの大学生』：ドッペルゲンガー（分身）は予兆する

1921年3月号『新小説』に寄稿した「映画雑感」のなかで谷崎潤一郎は、『プラーグの大学生』（1913年）について「永久的に価値のある」芸術的なものと述べている。

『プラーグの大学生』は、貧しい大学生バルドウィン（パウル・ヴェゲナー）が貴族の令嬢に恋をし、彼女に近づくために、莫大な金と引き換えに、鏡のなかの自分を売り渡すという物語である。行く先々で悪事をなす分身。追い詰められたバルドウィンが分身に向けた銃が火を吹く……倒れたのはバルドウィン自身であった。バルドウィンの墓に分身がふてぶてしく座ってあたりを睥睨する。そしてアルフレッド・ミュッセの詩「十二月の夜」の一節が映画最後のクレジットに掲げられる。

われは神に非らず、^あ将た悪魔にも。
汝はわが名にてわれを呼べり、
汝が汝の兄弟とわれを呼びし時。
汝の行く処にわれ常に在らん、
汝の生命の終わる日まで、
その時われ汝の墓石の上に座らん。

映画は、19世紀の詩人の孤独の道連れであったドッペルゲンガー（分身、自己像幻視）を、最新技術によって大衆のものにした。

『プラーグの大学生』は、1926年にリメイクされた。学生バルドウィンはコンラート・ファイト、彼の鏡像を奪う魔術師スカピネリはヴェルナー・クラウス、『カリガリ博士』のチェザーレと博士のコンビ再来である。美術は、これも『カリガリ博士』を手がけたヘアマン・ヴァウムだった。リメイク版は表現主義のモードに磨きをかけた。自己の分裂、「私」を追跡し追い詰めるもう一人の「私」という、ドッペルゲンガーのモチーフは、映画に、そして表現主義に、親和的だったのである。もう一人の「私」は、「私」を破滅に追いやる「私」ではあるが、自己愛というのとは異なる、それでいて「私」を魅了してやまない「私」という側面もありそうで、その愛憎、離れ難さは謎めいている。

ヴェルナー・クラウスが演じたスカピネリの方は、いうまでもなくゲーテ「ファウスト」のメフィスト



1926年版『プラーグの大学生』のコンラート・ファイト（上）（『キネマ旬報』昭和3年1月1日号）と同号掲載の広告（右）



フェレスにあたる役どころである。魂を売りわたせと悪魔の契約を迫り、悪をなさんとして善をなし、善をなさんとして悪をなす、メフィストフェレスは、舞台時代のヴェルナー・クラウスの持ち役でもあった。

1922年にベルリンに留学した村山知義は、舞台のヴェルナー・クラウス（シラノ・ド・ベルジュラック役）もみている。舞台のヴェルナー・クラウスと比較すると断然映画の方がいい、というの村山の評価だった。「セルロイドは彼をすっかり浄化」した、「最新の科学によつて「浄化された」と、スクリーンのヴェルナー・クラウスを絶賛している。村山『プロレタリア映画入門』（前衛書房、1928年）はいう——「十九世紀の小市民から二十世紀の金融資本家に至るブルジョアジーの呪ふべき独特な形貌を表現し得る俳優を現在我々はただ二人しか持つてゐない。／男ではウエルナー・クラウス。／そして女ではグレタ・ガルボ。」映画による浄化と呪いに対する村山の炯眼が光る。

ヒトラーが台頭して以降、コンラート・ファイトはイギリスへ、ついでアメリカへ亡命し『カサブランカ』に出演した。

美術家のヘアマン・ヴァウムはスイスに亡命した。表現主義が頹廢美術と敵視されたナチスの支配下で、『カリガリ博士』の脚本家、監督などのスタッフも亡命を余儀なくされた。

ところがヴェルナー・クラウスは、ヒトラーにもゲッペルスにも愛されて、ナチス・ドイツの文化大使と称された。ドッペルゲンガーは、魂を買い取る悪魔は、そして映画の呪いと浄化は、二十世紀の分断と恐怖を予兆している。